

シンポジウム報告「小劇場演劇の現在・未来」

立教大学池袋キャンパスが学園祭に沸く十一月五日、文学部文
学科日本文学専修主催のシンポジウムが開催された。制作者、実
作者、研究者が一堂に会し、現代演劇の一ジャンルである「小劇
場演劇」の現状と課題、展望について議論が交わされた。当日の
プログラム等は以下のとおりである。

公開シンポジウム「小劇場演劇の現在・未来」

【主催】立教大学文学部日本文学専修・日本文学専攻

【共催】立教大学日本文学会、立教大学日本学研究所、立教大
学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

【日時】二〇一七年十一月五日（日）十三時～十八時

【会場】池袋キャンパス太刀川記念館三階多目的ホール

開会挨拶 石川巧（立教大学教授）

趣旨説明 後藤隆基（立教大学教育研究コーディネーター）

「近現代演劇史のなかの〈小劇場演劇〉」 後藤隆基（同前）

「アングラ演劇から学生演劇、そして……」

高萩宏（東京芸術劇場副館長）

「私の小劇場活動」 早船聡（劇団サスペンデッズ主宰）

「野田秀樹と小劇場運動——『贋作・桜の森の満開の下』を
中心に」

嶋田直哉（明治大学准教授）

パネルディスカッション（司会・石川巧）

まずはチラシに記された概要を紹介しておこう。

演劇史をふり返ると幾多の小劇場演劇が誕生し消えていっ
た。いくつかの作品は、より多くの観客を魅了する演劇作品
として評価され、優れた表現者たちを世に送り出していった
が、それ以外の殆どの作品は、ごく限られた観客の記憶に残
るだけで消えていった。小劇場演劇は自由で多様な表現世界
をもっている。エンターテインメントとしても優れている。

だが、その愉しさを知っているのは劇場に足を運ぶことがで
きるごくわずかな観客のみであり、そこに居合わせることが
できない大勢の人々にとっては永遠に出会うことができない
未知の世界である。本シンポジウムはこの問題に焦点をあて、
多くの人々がその魅力を知ることができる環境を整えるには
何が必要なのかという観点から小劇場演劇の現在と未来を展
望し、可能性を掘り起こそうとするものである。

基本的な趣旨は右の一文に尽きる。演劇の一回性という問題は
小劇場演劇にとどまるものではないが、とくに小劇場演劇の多く
は「記憶」に残っても「記録」に残ることが少ない。また一口に
小劇場演劇といっても世代や環境で受けとめ方、定義の仕方、考
え方などは様々である。たとえば、小規模の劇場空間というハー
ド面の問題。現在に至るまで多様化・細分化してきた劇団も含め
たジャンル論の問題。くわえて〈運動〉としての小劇場演劇とい
う問題——等々。

そうした問題意識に立ち、本シンポジウムでは時代を通観する
日本の小劇場演劇史をたどることがひとつの眼目であった。

まず後藤隆基は、小劇場演劇の「現在」と「未来」を考えるための「過去」の検証として、幕末・明治期の小芝居や川上音二郎の企図した小規模劇場での試み、築地小劇場、敗戦直後に乱立した群小劇団・小劇場といった流れを、いわゆる小劇場演劇の前身として捉えようとした。

次いで高萩宏氏は、アングラ演劇に端を発する〈小劇場演劇運動〉が育まれた一九六〇年代以降の劇壇状況について、制作・興行側の立場から講演を行った。高萩氏は明治期以降の教育制度の中に演劇が位置づけられなかったという問題を指摘し、自身が夢の遊眠社を運営してきた体験や、海外の小劇場演劇（大劇場に対して芸術的な創作を行う）とは異なる日本の小劇場演劇の特異性もふまえつつ、一九六〇～八〇年代の動向を整理した。

そんな高萩氏らがつくってきた舞台の観劇をひとつの原体験として演劇を始め、小劇場で活動を続けている後続世代の早船聡氏は、自身の来歴や主宰する劇団サスペンデッズについて、ゲスト俳優（佐藤銀平氏、柿丸美智恵氏、吉牟田真奈氏）によるリーディングや舞台映像などによって作品生成のプロセス等を実践的に、かつ楽しく見せてくれた。また劇団経営の内情をも示しながら、小劇場演劇の一劇団の実態について率直な意見を述べた。

嶋田直哉氏は、現在東京芸術劇場の芸術監督を務める野田秀樹の代表作のひとつであり、二〇一七年七月に歌舞伎座でも上演された『贗作・桜の森の満開の下』（一九八二年初演）について、王権の交代というモチーフを視座として精緻な作品分析を行った。その作業を通して、夢の遊眠社からNODA・MAPという現在までを射程に入れた小劇場演劇のありようと変容等について

議論を展開した。

最後に、前半の発表・講演をふまえて、登壇者四名によるパネルディスカッション（司会・石川巧）が行われた。小劇場演劇を實踐する上での経済的問題、教育（殊にコミュニケーション教育における役割）の中に演劇を位置づけることの必要性、小劇場演劇のアーカイブ化の問題、劇評とジャーナリズムの重要性などについて約一時間半に及ぶ議論が展開された。現代演劇の現場に携わる高萩氏と早船氏、研究にとどまらず演劇専門誌『シアターアーツ』編集長として演劇批評を執筆し続けている嶋田氏との対話は、現代演劇の状況を多角的に捕捉する貴重な機会だった。

フロアとの質疑応答では、若い世代の俳優（志望者）からの演劇を生業とするための方途に関する質問に、高萩氏と早船氏から「誰も見たことがないものをつくること」という率直な答えが出たことも印象的であった。くわえて、劇団が生き残る（あるいは売れる）ためには優れた制作者の存在が必須であるという高萩氏のコメントも傾聴に値するものだろう。

本シンポジウムでは——重言ながら——狭義の「研究」発表だけでなく、そこに現場で演劇をつくり続けている表現者／証言者の声をつなげることで、研究と実践の横断的な議論の場づくりが実現できたように思う。また登壇者のうち三名（早船氏、嶋田氏、後藤）が立教大学日本文学科（現・文学科日本文学専修）の卒業生であり、そこに立教大学と連携協定を結ぶ東京芸術劇場から高萩氏（立教大学で兼任講師も担当）を招いたことは、今後の立教大学における演劇研究の可能性を考えるうえでも大きな成果となったに違いない。

（文責・後藤隆基）